



N響 × 指揮者 井上道義 ピアノ 小曽根 真

「今この人でこの曲目が聴きたい!」というプログラムを実現したと誰もが思えるコンサート。

昨年のショスタコーヴィチ・プロジェクトが大成功を納め、演奏するホールと楽曲の組合せに新しい提案をした井上道義。埼玉会館では、N響という優れたオーケストラを得て、どのような音を響かせてくれるのかに期待がふくらむ。ピアニストとしてジャズ界で世界の頂点に立ちながら、その音楽性がクラシックにも花開き評価の高い小曽根 真をソリストに迎えたガーシュウインは、言うまでもなく現在最高の組合せと言えるだろう。

文 = 奥田佳道 (音楽評論家)

楽の音を放射し、ステージでの立ち居振舞いも「ダンスブル」で絵になる指揮者と、ジャンルをしなやかに飛翔するピアニスト、それに日本のリーディング・オーケストラが顔を揃えるライブが近づいてきた。しかも新感覚の20世紀名曲選。コミックやドラマでお馴染みになったジャジーなピアノ・コンチェルトも披露される。一期一会のコンサートのために役者が顔を揃えた、と開演前から熱くなってしまっても構わないのではないかな。

古き良き時代のアメリカを「奏でる」コープランドのバレエ音楽《ピリー・ザ・キッド》、おなじみガーシュウインの《ラブソディー・イン・ブルー》、それにクラシック・ファンばかりでなく、あらゆるパフォーマンス・アーツ好き、モダンアートに関心を寄せる向きを熱くする旧ソ連の作曲家ショスタコーヴィチの機知に富んだ《交響曲第9番》。思わず喝采を叫んだ方も多いのでは。

井上道義指揮のショスタコーヴィチへの期待



「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト2007」より

男の本懐を遂げたか。芸術家としての信条、心情を吐露し尽くしたか。昨年11月から12月にかけて日比谷公会堂で行な

われた「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト2007」に全身全霊を傾け、サンクト・ペテルブルク交響楽団を含む5団体のオーケストラを指揮し、世代を超えた聴き手を大いにうならせたのが井上道義という指揮者である。世紀転換期を彩ったマーラーや北欧フィンランドのシベリウスにも旨味を発揮するいっぽう、オーケストラ・アンサンブル金沢の音楽監督として活躍中だが、今、ショスタコーヴィチといえば、やはりこの人で聴きたいというのが客席の想いだらう。ショスタコーヴィチの交響曲全15曲のなかで、第2次大戦終了時に書かれた第9番ほどリズムに弾み、しかもシニカルな笑いにあふれ、ソロやパートの妙技が楽しめる曲は、ほかにない。《第9》再発見のステージをどうぞお聴き逃しなく、井上道義とN響の交歓をどうぞお見逃しなく。

小曽根 真で聴く ラブソディー・イン・ブルーの贅沢

楽の音と自在に戯れる小曽根 真への賛辞は尽くされている。筆者が企画のお手伝いをしている北九州国際音楽祭でもモーツァルトの《2台ピアノのための協奏曲》(2台ピアノ版)に腕を振るってくださった。以前にも^ま況してモーツァルトとガーシュウインの世界と相思相愛のMakoto OZONEが、気心の知れた井上道義の指揮に導かれ十八番を披露するとは何とも喜ばしい。オーケストラも触発される予感。これだけでも楽しみ無尽蔵の夏のコンサートには、アメリカの「^{うたい}謡」と舞がこだまするコープランドの佳曲も添えられた。開演まで、もう少しの我慢だ。